

第 140 回定例研究会

タイトル:パシフィック・ディアスポラ—四重意識とハワイの沖縄系人の文化実践を通して—

要旨

博士論文は、戦後生まれのハワイの沖縄系人のトランスナショナルな文化実践及び近代的な国民国家に囚われない沖縄系人のディアスポラ文化のあり方を、沖縄系人のディアスポラ文化と沖縄系人の関係性を通して明らかにしている。

沖縄系人のディアスポラ文化は、「日本—沖縄—ハワイ—アメリカ」の関係性を軸に構築されてきた。正確に言えば、それは、ハワイの沖縄系人が抱える「日本—沖縄—ハワイ(ローカル)—アメリカ」の 4 つの意識を反映したディアスポラ特有のハワイの沖縄系音楽文化である。

戦後世代のハワイの沖縄系人は、W. E. B. デュボイスが論じるところの「二重意識」よりもさらに複雑化・重層化した「四重意識」を持ち合わせている。この意識は、沖縄系人の「日本—沖縄」の間で揺れ動くルーツのエスニシティと、彼らが生まれ育った「アメリカ—ハワイ」の特殊な社会を通して生まれ、ハワイの沖縄系人独自の文化体系を築き上げてきた。

沖縄系人は、「日本—沖縄—ハワイ(ローカル)—アメリカ」の中で意識のポジショニングを行い、ある時には日本性を消し沖縄人になり、ある時には沖縄性を消し、ハワイのローカルになり、ある時にはローカル性を消すことで、アメリカ人になることで、自身のアイデンティティを状況や状態に応じて取捨選択し、時に共存させてきた。このポジショニングの背景には、第二次世界大戦前後における(新)植民地主義の問題や島国特有の事情、「日本—沖縄—ハワイ—アメリカ」の歴史的・政治的関係性、ディアスポラ特有の価値観などがあり、四重意識は、こうした複雑性と重層性を持ちあわせながら、沖縄系人特有のディアスポラ文化を築き上げてきた。

日本と沖縄という宗主国／植民地の関係をアメリカ／ハワイの関係と交錯させて議論し、近代以降のアイデンティティと国家の複雑な関係を再考することで、流動的で断片的、混濁的な特徴をみせる「沖縄」文化のあり方が提示される。